

『発心集』の説話配列と長明の浄土思想

池 田 敬 子

—

鴨長明の編集にかかる仏教説話集『発心集』は、流布本系統（慶安四年版、八巻など）と写本系統（神宮文庫本、五巻など）との大きく二つの本文系統があり⁽¹⁾、説話数も説話配列も大きく相違する。古写本がなく、現在我々の見ることのできる本文がこのように極端に異なるものであるところから、成立以後、後人の手によって説話増補が行われ、あるいは配列変更が行われたことは確実と考えられているが、いまだその過程については不明であり、また、長明の原編集がどのような形態であったかも分っていないといわざるを得ない。しかし、廣田哲通氏ら⁽²⁾による説話配列及び本文についての研究や、山内益次郎氏ら⁽³⁾による後代説話集にみられる『発心集』説話の抄出や依拠説話の調査などにより、おおむね次の点が指摘されている。

まず、説話配列は慶安四年版がより原形に近いものであろうこと、しかし巻数は八巻であったかどうかは不明であり、五巻形態のものは後世の改変であろうこと、また、慶安四年版の説話本文にも後代の手が加わったと思われるものがあり、一方では神宮本の説話本文に古態がみられる場合もあって、考察には慎重を要すること等である。

しかし、まだ長明の浄土思想と関わらせての説話配列の考察は十分に行われているとはいえない。本稿は、長明が説話末尾に記す評文と説話自体が示す内容との検討によって、そこに見える浄土思想のあり方を考え、『方丈記』の著者でもある長明の思想として、説話配列に働いたであろう意識を知ろうとすることを目的とする。巻二第八話・第九話・第十話と、巻三第一話から第四話までの二カ所を取り上げ、それぞれの説話間の配列を検討すると共に、できれば巻二と巻三のつながりについても考えてみたい。

慶安四年版と神宮文庫本の共通説話は、全六十話、これらはすべて慶安四年版では巻一から巻六に収められており、慶安版の巻六までの所収説話のうち、神宮文庫本に見えないものは、巻四に三話（第一話・第三話）、巻五に五話（第二話・第六話・第九話）、巻六に七話（第一・二話・第五話・第九話）の十五話である。慶安四年版の巻七・巻八の説話二十七話は、神宮文庫本には一切見えず、また神宮本のみ独自の説話も四話ある。このような事情から本稿ではひとまず、慶安四年版巻一から巻六に所収される説話のうち、神宮文庫本と共通する説話のみを長明編集当時の『発心集』に存在した可能性の高い説話であるとして考察の対象とする。

考察にあたっては、諸本の二系統をそれぞれ慶安四年版と神宮文庫本の本文に依り、いずれも『鴨長明全集』⁽⁴⁾所収の本文を使用する。引用に際しては、漢字平仮名まじりに改め、私に句読点を改める場合がある。

二

さて、長明は『発心集』序において次のように述べている。

はかなく見事、聞事を註しあつめつつ、しのびに座の右にをける事あり。即、賢きを見ては及難くともこひねが

ふ縁とし、愚なるを見ては、自ら改むる媒とせむとなり。今、此を云に、天竺、震旦の伝聞は、遠ければかず。仏菩薩の因縁は、分にたへざれば是を残せり。唯、我国の人の耳近を先として、承はる言の葉のみ注す。

長明自身は「我国の人の耳近きを」「承はる言の葉をのみ注す」として明言を避けているが、この発言のみからも彼が「往生伝」を資料として用いていることは推測できる。慶政は『閑居友』⁽⁵⁾第一話において彼自身の編集方針を述べる中で、

発心集には伝記の中にある人々あまたみえ侍めれど……中略……長明は人の耳をもよろこばしめ、また結縁にもせむとてこそ伝のうちの人ものせけん

と、長明が「往生伝」に所載されている説話を再録していることを記している。長明の時代には、すでに多くの「往生伝」が成立しており、『日本往生極楽記』『法華験記』『続本朝往生伝』『拾遺往生伝』『後拾遺往生伝』⁽⁶⁾は、確実に読んでいたものであった。「往生伝」の存在が『発心集』編集の動機付けとなったことは間違いないだろう。『発心集』も、往生に失敗した説話をいれながらも、まさに「往生伝」であることは一読すれば了解できることである。しかし書名の『発心集』が示す通り、彼の関心は往生できたか否かより、如何にして往生し得たか、あるいは如何にして往生につながる「発心」をし、それを持続し得たかというところにあるように思われる。

卷一は、出家者の遁世（隠遁）譚群から始まり、執着心を断つ説話（あるいはそれに失敗する説話）群を経て、隱徳（あるいは偽悪）説話に至る。これらは最初の遁世（隠遁）譚に対して「市井の大隠」譚でもある。慶安四年版は卷一

に十二話を有するが、神宮文庫本は十一話であり、それは慶安版の第一話から第十一話までと、説話本文・配列共に一致する（慶安版第十二話は神宮本では巻五第九話）。慶安版と神宮本がこれだけの一致を示すのは、巻一のみであつて、巻二から巻五は説話配列が大きく異なっている。おそらく、巻一については、長明編集当時の姿を慶安版と神宮本ともに留めているのであろう。このような巻一の説話配列については、廣田氏の論において詳しい検討が行われ⁽⁷⁾、『発心集』の説話配列が説話内容と関わって慎重な意識に基づいて行われたものといわれている。巻一の説話配列は長明の配列方針が、明確に読み取れる巻であり、本来、『発心集』は、説話配列に編者自身の明確な構想が現れているものであつたと推察してよいと思われる。

そこで、巻二以下の説話配列にも長明の編集意識をたどり得るはずであるということ为前提として、巻二第八話・第九話・第十話について考えてみたい。

巻二第八話「真浄房、暫作天狗事」は、「鳥羽の僧正とてやむ事なき人」の弟子であつた真浄房が念仏三昧の行者として往生できるはずであつたにもかかわらず、鳥羽僧正の臨終に「今日こそ別れ奉るとも、後世には必ずあひてつかふまつるべき也」と約したために、鳥羽僧正の墮した天狗道に六年間拘束された話である。話末には次の評語がみえる。

其を聞人、たとひ行徳高き人なりとも、必是に値遇せんと云ふちかひをば起すまじかりけり。彼は取はづして、悪き道に入たれば、あへなくかかるわざなりとぞ云ける。

長明のこの説話への関心の中心は、「必是に値遇せんと云ふちかひをば起すまじ」きことであつたと思われる。巻一

の中間部分の説話群で示した、執着の恐ろしさ・執心を断つべきことと、真浄房の約束はかかわっており、真浄房が「必是に値遇せんと」誓ったことは、彼が「執心」を抱いたことに直結するはずで、その悪道への転生はいわば当然であった。しかし、この説話は巻一ではなく、巻二に収められており、話末の評とは異なる意識が配列に際して働いたと考えるべきである。

この説話の直前の第七話は「相真没後返袈裟事」で、持つ人に往生をもたらず袈裟の不思議をテーマとする。「世くだり、人をとろへて、不思議をあらはす事ありがたし。此は、濁れる世の末にたくひすくなき程の事也」との評からも、編者の関心が「不思議」にあったことは疑えない。それならば、第七話の次に真浄房話を配置するに際し、第八話に前話と連想の繋がる「不思議」の要素があったと考えられ、それは「鳥羽の僧正とてやむ事なき人」、「行徳高き人」が「取はづして、悪き道に入」ったことではなかったか。第八話は、「鳥羽僧正」の具体的な行徳も悪因もいつさい語っていないようだが、臨終に弟子に向って「年来むつまじふ思ならはせるを……今、長く別れなむとす。今日やかぎりならむと、云もやらすなけれければ」という言葉と涙が、僧正の「取はづして」に相当すると読むべきでもあろうか。慢心が天狗道に堕ちる因とされること⁽⁸⁾から、「やむ事なき、行徳高き」僧正の慢心による油断からついこぼれ出た臨終の言葉が自身をも、再会を約した真浄房をも天狗道へ導いた話と解釈できよう。「やむ事なき、行徳高き」僧正の「取はづし」が、「不思議」なのであると読みたい。

続く第九話は、「助重、依一声念仏往生事」である。

承久の比、前滝口と云物ありけり。近江国蒲生の郡の人也。盗人にあひて射ころされける間に、其箭の背にあたる時、声をあげて南無阿弥陀仏とただ一声申て死しぬ。其声高、となりの里に聞けり。人来て是を見ければ、西

に向て居ながら眼をとぢてなむ有りけり。

……(二人の人物の夢に助重の往生が示される)……

彼僧正の年来の行徳、助重が一声の念仏の外の事なれど、彼は悪道に留り、此は浄土に生る。爰知ぬ、凡夫の愚なる心にて人の徳程計り難き事也。

一読して、この話は一念往生譚であることと、長明はこれに不思議の念を抱いていることがわかる。第八話とは正反対の話であるが、「やむ事なき、行徳高き」僧正の「取はづして」の天狗道に墮したことが同様に滝口武士の一念往生は、長明にとつて「凡夫の愚なる心にて人の徳程計り難き事」であつた。「人の徳」は計り難いという口調には長明のいささか不満気な表情が読み取れるようですらある。親鸞ならば当然であつたことが、いまだ長明には不思議であつた。一念往生は、善導の『般舟讚』の紹介によつて広まる思想であるが、貞永元年(一一三三)に書与されて以後流布したといわれる。つまり『発心集』成立までには『般舟讚』は知られておらず、これは長明にとつて当然の反応ではあつた。

第七・八・九話間にに働く連想は「不思議」であるが、第九話が節目となつて新たなテーマが始まる。

第十話「橋大夫、発願往生事」は、八十を過ぎるまで仏法を知らず、斉日にも精進せず、法師を貴ばず教化する人を馬鹿にする「すべて愚癡極れる人」が臨終正念に往生し、あまつさえ紫雲現われこうばしき香満ちるといふ瑞相まであらわれた。妻の話では、おとしの六月から毎夕、阿弥陀の本願を頼む「発願文」を読み合掌していたという。また時のかわるごとに最後の思いをなして十念を唱えることのみを行つた聖人のことも加えられている。話末の評語は次の通りである。

勤むる処は少けれども、常に無常を思て往生を心にかけてむ事、要が中なか要也。若、人心にわすれず極樂を思へば、命をはる時必ず生ず。たとへば、樹のまがれる方へたふるるが如しなむど云へり。

一見、助重同様になぜ往生できるのかわからぬ人物の往生の理由が、「発願文」で明らかにされる。しかし「おとしの六月」からであった。あるいは、時のかわること十念を唱えるというだけの行しか行わなかった聖人も往生した。やや「不思議」の感はあるが、「常に無常を思て往生を心にかけて」という「心」のあり方、発心とその一定期間の持続に長明は納得している。「心」の見えなかった鳥羽僧正と助重とは、「人の徳」の程が計れなかったが、第十話の二人の人物の「心」は、行の少なさはあるものの長明の肯定範囲にあったわけである。

いわゆる「悪人往生」の話は、『続本朝往生伝』から見られるようになる。第九話の助重往生譚は『後拾遺往生伝』と『本朝新修往生伝』に、第十話の橘大夫の話は『拾遺往生伝』にそれぞれ採録されている説話である。助重は悪人の範疇に入らないだろうが、橘大夫は「愚癡極まれる人」であって、明らかに十悪の悪人である。

助重往生譚は二つの往生伝に見られる。『本朝新修往生伝』も長明の目に触れたはずであるが、おそらく『後拾遺往生伝』の方に依っているとされる。本文は往生伝の叙述の順序を入れ替えて事件を分かりやすくし、漢文体を和らげたスタイルであるが、『本朝新修往生伝』に見られる「群兵競ひ来る」という表現を欠き、「夢に往生を告ぐ、又宿善に依る歎」という助重の理由の推理を行っていない点などから、『後拾遺往生伝』に依るものと判断する。もし「宿善に依る歎」の本文に依っていたならば必ずその点を長明は云々したに違いないとも思われるが、先述の通り「人の徳」は計り難いと結んでいたものであった。

第十話の橘大夫譚については、現在類話は『拾遺往生伝』しか知られていないが、果たしてこれに依拠したかどうか

か疑わしい。『拾遺往生伝』と『発心集』では、「発願文」の思想が異なるのである。両者の「発願文」を比較してみる。

『拾遺往生伝』	『発心集』
<p>弟子敬て三世の諸仏、十方の聖衆に白さく、始め強仕より終り八十に至るまで、念を弥陀仏に繋けて心を妙法経に帰せり。</p> <p>就中に今日より後、死期の以前に淨穢を論ぜず、衣服を整へずして毎昏に西に向ひ、二手合掌して弥陀の宝号を唱へ、法花の題目を称へむ。もしくは命終の刻に、邪倒心を礙へて念仏すること能はじ。故にこの長時の一称をもて必ずその命終の十念となしたまへ。また法花経寿量品の偈を誦すること十遍なり。願以此功德、普及於一切、我等与衆生、往生安樂国。永長元年六月廿四日、始めてこの願を發せり。諸仏菩薩、悉く知り悉く見たまへ。</p>	<p>弟子敬て西方極樂化主阿弥陀如来、觀音、勢至諸の聖衆を驚て申す。我、受け難き人身を受けて適仏法に遇と云へども、心本より愚癡にして徒に明し暮して空く三途に帰りなんとす。然るを阿弥陀如来、我と縁深くをはしますに依て、濁れる末の世の衆生を救はんがため大願を發し給へる事ありき。其趣を尋ぬれば、設四重五逆を作れる人なりとも、命終らん時我国に生れんと願ひ南無阿弥陀仏と十度申さば、必ず迎へむと誓給へり。</p> <p>今、此本願を憑むが故に、今日より後、命を限にて夕ごとに西に向ひて宝号をとなふ。願は今夜まどろめる中にも命尽なん事あらば、此を終の十念として本願あやまたず極樂へ迎へ給へ。設ひ残の命あつてこよひ過たりとも、終り願の如くならずして弥陀を唱へずは日比の念仏を以て終の十念とせむ。我罪重しといへども、いまだ五逆を作らず。功德少しといへども深く極樂を願ふ。則、本願にそむく事なし。必ず引接し給へ。</p>

『拾遺往生伝』は傍線を施したところに見られるように、法華経・念仏兼修のまさに天台浄土教の典型的あり方を示しているのに対し、『発心集』は専修念仏である。長明は『方丈記』の叙述を見れば、法華経念仏兼修であったと思われ⁹⁾、長明自身が専修念仏發願文に書き替えたとはいささか考えにくく、既に書き替えられた文献に依ったと考えるのが穏やかであろう。前話が一称念仏話であることから、念仏のみの話を採用したのではあるまいか。第十一話の来客との対面を拒み念仏し続ける聖の話への布石としても、橘大夫は専修念仏の人物である方が統一的に説話が連

続することになるだろう。

ちなみに神宮本では、第七話の袈裟の不思議譚は卷四第一話、第八話の鳥羽僧正と真浄房の説話は卷五第八話と大きく位置を異にし、また第九話の助重往生譚は卷二第二話と跳び跳びになっており、慶安版のような配列意識のもとにはない。袈裟の不思議譚の次には「或る禅尼に山王の御託宣の事」が続くが、これは神宮本の独自説話である。日吉明神が往生には慈悲と質直と旨とせよと教える話で、連続配列の意味は不明である。鳥羽僧正と真浄房の説話の前後は、「乞児物語」と「乞食の僧隠徳事」であり、やはり連続配列の意味を見出しにくい。助重譚と橘大夫説話は位置が逆転していることになる。

そして、『発心集』は、第十一話の客人に会う事も拒否して念仏し続けた、「勤むる処は少」なからぬ、「此事あまりきびしく覚ゆる」聖の話へと進み、長明のより納得し得る方向への説話配列がなされていることが理解できるのであるが、日本におけるいわゆる浄土思想の発展とは別に、「勤むる処」の「少」き、あるいは不明なものから、「おとしの六月から毎夕」の発願文読誦へ、時のかわることの十念という勤めへ、そして絶え間ない念仏の聖へと、念仏行者の列が、長明のより評価できる方向へと配列されているのである。

三

『発心集』慶安四年版卷三には、前章で取り上げた卷二第九話・第十話と関連しそうな説話が冒頭から並んでいる。第一話「江州増叟事」は暑きにつけ寒きにつけ、あらゆる事に付けて、まして地獄は、まして極楽はとの思いで「まして」を口にする「乞食しありく翁」の往生予告の話で、「必しも浄土の莊嚴を観ぜねども、物にふれて理りも思けるも又往生の業となんなりにけり」と結ばれる。これは念仏でも発願文でもない全く個人的な、ある意味では原初

的な信仰心のあり方とも言えることで往生を約束されるという話で、正統的な仏法世界では思い付かぬ行というべきものが、往生の因となることを語るものである。

第二話「伊予僧都大童子、頭光現事」は、伊予僧都の召し使う大童子が「時の間もをこたらず」念仏し続け、「頭の光」を発するようになり、感動した伊予僧都の計いによつて他念なく念仏できる境界を与えられ、往生を遂げる話であり、話末は次の評文である。

往生は、無智なるにもよらず、山林に跡をくらうするにもあらず、只云ふかひなくこうつめる物、かくの如し。

「云ふかひなく」が難解である。神宮本は「唯功を積める者は、必大往生遂也と、云々」とし、この本文の方がわかりやすいが、「大往生」という室町時代も半ばにらねば用例の見えぬ語⁹⁰を使つており、慶安版のような意味のわかりにくい本文を改めた可能性が高い。他に類話もなく、「いふかひなき者」が功を積むという解釈は、身分の低い者が往生できるほど念仏を行うことは稀であるという意味になってしまい、『発心集』説話の登場人物たちを見るに、本説話で事改めていうはずがないと思われる⁹¹。文脈的には「いいようもなく、言葉に表せぬ程ひたすら」と理解したい所であるが、「云ふかひなし」の語義からは無理があり、第一話末尾の係結びが乱れていることとともに、後世に本文が改められた可能性もあるかもしれぬ。一旦文脈から推して「こうつめる」を肯定的に修飾する語であろうとのみしておく。説話のテーマは身分の低いものでも念仏行を長年かつ暇なく積むことにより、「頭の光」を発するなどの奇瑞を現し往生可能ということである。第一話の正統的でない行と併せ、この二話がこの順で配列されるのは納得しやすい。

しかし、なぜこの説話が卷三におかれているかについては一考の価値があるろう。卷二第九話・第十話・第十一話とならべて配されてもよかつたのではないか。「絶え間ない」という点では、卷二第十一話の手にこれら二話が置かれても、不自然ではなかつたと考えられる。

卷二の三話の主人公たちは、前滝口助重・橋大夫守助〔拾遺往生伝〕では散位従五位下橘朝臣守輔・或上人であつた。卷三第一話は「乞食しありく翁」でしかも「まして」という正統的な行ならぬ口癖によつて往生した。卷三第二話は、念仏行であるが「大童子」つまり年齢は重ねても童子姿のある意味では人数ならぬ者であつた。長明にとつて、これは決定的な相違であつたに違いない。卷二の三話とは同列に配することのできない行であり、主人公の身分であつたと思われる。そこで巻を分けざるを得なかつたのであろう。

さらに、行の種類と主人公の身分から巻を分けるにしても、卷三第十一話との連続性を維持することをなぜしなかつたのか。つまり、卷二にはなぜ第十二話・第十三話があるのかという問題が次に浮上してくる。卷二第十二話は「舎衛国老翁不踰宿善事」、第十三話は「善導和尚見仏事」である。この二話は序にいう「天竺、震旦の伝聞は遠ければかかず」に背くものであり、このことで、長明編集当時はこの二話はなかつたと考えるべきであるとの説もある。序に背くと同時にまず第十二話は、「宿善」を問題とするところで第九話・第十話・第十一話の連続の流れに合わないといふべきであらう。第九話助重譚で、長明は『本朝新修往生伝』のいう「宿善」を取らなかつた。その後の第十話・第十一話の流れにも「宿善」はあわない。第十一話の念仏絶え間ない上人の逆転と取れないことはないが、すると次の善導の話がまた逆転となつて、これまでの説話配列のあり方とにわかに異なる、逆転を連続させる配列法となつてしまふ。加えて第十二話末の、

我、たまたま法華經に値たてまつり、弥陀仏の悲願を聞ながら、つとめ行わずして、徒にあたら月日をすごす。露もたがはず、乞者のをきな也

は、第十話を法華經・念仏兼修とする往生伝所説をあえて専修念仏として第九話から第十一話を念仏行の話とした長明の編集方針をも、自ら逆転することになって不自然というべきであろう。

第十三話の善導が阿弥陀仏に会って、道綽の往生極樂の成否を問う話も不自然な流れといえよう。阿弥陀の「木を切には斧をくだす。家にかへるには苦を辞する事なし」ということばとその解釈は一見第十話末尾の評と通うように見えるが¹²⁾、第十一話が記された後には蛇足の感が否めず、さらに第十二話を間におくと配列の連続性が不明になる。序との乖離を含めて、おそらく第十二話・第十三話は本来卷二にはなかつたものと結論するのが最もふさわしいであろう。

卷三に戻る。第三話・第四話はいずれも有名な「伊予入道往生事」と「讚州源大夫俄発心往生事」である。

第三話の源頼義往生譚は『続本朝往生伝』所収、長明はその後に子息の義家墮地獄譚を加え、その間に次の評を挿んでいる。

多く罪を作れりとしてひげすべからず。深く心を発してつとめ行なへば、往生する事又如是。その息は、つゝに善知識もなく、懺悔の心もをこさざりければ罪ほろぶべき方なし。

罪深くとも、「善知識を得て懺悔、発心し勤め行う」ことで往生できるといふ。頼義はまさに、十二年間謀叛の輩を

滅ぼし（殺し）、諸々の眷属に境界を失わせたが、「みのはの入道」という善知識を得、忽に発心出家し、罪を悔い悲しみ大量の涙を流し、勇猛強盛の心を起して往生を信じ、（おそらく勇猛精進し行業を積み）往生した。

本話の出典『続本朝往生伝』は次のようにいう。

（頼義ハ）累葉武勇の家に出でて一生殺生をもて業となせり。況や征夷の任に当りて、十余年来ただ鬪戦を事とせり。人の首を梟し物の命を断ちしこと楚越の竹といへども計へ尽すべからず。……中略……瞑目の後多く極楽往生の夢あり。定めて知りぬ。十悪五逆も猶し迎接を許さるることを。何ぞ況やその余をや。この一両を見るに、ただ持みを懸くべくなり。

頼義はいわゆる「十悪五逆」の悪人、本話は「悪人往生譚」である。第二話の人数ならぬ者との連続性はここにあり。善知識の「此世の無常、身罪のむくひのおそるべき様」を聞き、忽ち発心した頼義は『発心集』の題名にふさわしい人物である。しかも長明の評価する勤め行う事多く、強い人であった。

第四話の源大夫は、「仏法の名をだにしろらず、いき物をころし、人をほろぼすより外の事な」き、頼義同様「十悪五逆」の悪人であった⁽¹³⁾。たまたま通りかかった家で行われていた法会に踏み込み、僧の話の話を聞き、

我、法師になりて其仏のをはしまさん方へ参らんと思に道をしらす。心をいたしてよび奉らんと思にいらへ給ひなんや

と聞き、「誠にふかく心をおこし給はば必ずいらへ給ふべし」の答えを得て即座に出家、「南無阿弥陀仏」と申してひたすら西に行き、阿弥陀の答える声を聞いて、舌の先から「青きはちすの花なん一ふさをひ出たりける」姿で往生する。やはり善知識に遭いたちまち発心出家し念仏を唱え続けるという、頼義と類似した人物であった。頼義と異なるのは、教えを理解し懺悔して心強く行業を積むのではなく、無心に信じて阿弥陀を呼び続けたことに阿弥陀が答えた点である。話末の

功つめる事なけれども一筋に憑奉る心ふかければ、往生する事またかくのごとし

が、本話の意味を語り尽している。

往生できそうにもない者達、即ち「まして」が口癖の乞食翁・人数ならぬ大童子・「十悪五逆」の悪人頼義と源大の四人の往生が卷三冒頭から連続する。しかし彼らは、「必しも浄土の莊嚴を觀ぜねども物にふれて理を思い」、無智で遁世もせずとも「云ふかひなくこうつめる」者であり、十悪五逆の悪人であろうと発心出家しその発心を維持し続け得たもの、或いは無心に信じて阿弥陀を憑んだ者、がそれぞれ往生したのであった。卷二の第九話・第十話・第十一話とは異なる往生の因が卷三冒頭四話において提示されているのである。またこの四話の並び方は、日常生活の中で静かで持続的に行を維持する心から、瞬間的爆発的な発心と行のエネルギーを示す話へと展開させるものであった。

卷二末から卷三卷頭へと類似の説話を配列して、連続性を失わぬようにしつつ、卷二と卷三はやはり巻を分けるのがふさわしいように、説話の主題を変えていく方法は、やはり編者長明の周到な構想が生きているといつてよいであ

ろう。そして、第四話を結節点として、捨身行の人物達の説話群が次に展開される。源大夫の突然の発心と、続く一切の世俗を放棄して阿弥陀の答えを求めて西に歩み続ける行為は、「捨身」という新たなテーマを示しているのである。

神宮本では、慶安版の第一話から第三話は、この順序で卷二の第四話・第五話・第六話に位置しているが、第四話は卷二第三話となっていて、「ましての翁」の直前にある。卷二第一話は橘大夫説話、第二話が助重一称念仏の話であって、これまでに述べてきた慶安版の卷二・卷三の別の意味が見失われると同時に、行の多寡あるいは功德の多少、主人公の属性ともに混乱してしまう配列となっているとしか、読み得ない。神宮本はやはり後世の改変本であるということである。

天台浄土教から法然浄土宗へ、そして親鸞浄土真宗へという、浄土思想の展開を既に知っている我々にとつては、どの説話が最も進化した浄土思想を示すものか自明であるといっても、長明の生きた時代は、ようやく法然が専修念仏を唱え始めた頃であった。既に自分自身の思想を形成していたであろう長明が、卷二・卷三に亘るところで示しているその思想は、序という通り「心の師とは成とも、心を師とする事なかれ」という仏の教えに対し、「且、自心をはかるに、善に背にも非ず、悪を離るるにも非ず。風の前の草のなびき安きが如し。又、浪の上の月の静まりがたきに似たり。何にしてか、かく愚なる心を教へんとする」に応じて、発心のあり方を重視し、その発心を維持し行を積む心の強さに大きな関心を寄せるものであった。

註(1) 『発心集』の諸本は次の通りである。

流布本系統 慶安四年片仮名整版本

『発心集』の説話配列と長明の浄土思想

寛文十年平仮名整版本

刊年不明本

写本（異本）系統 神宮文庫本（天明四年八月、神宮林崎文庫に奉納）

素行文庫本（山鹿素行写、平戸市山鹿光世氏蔵）

- (2) 廣田哲通氏「発心集」の説話配列・『発心集』本文をめぐる諸問題」（『中世仏教説話の研究』勉誠社 昭和六十二年刊）
- (3) 山内益次郎氏「神宮文庫本『発心集』解説」（『神宮古典籍影印叢刊9』西公談抄 発心集 和歌色葉集抄書』八木書店 昭和五十九年刊）
- (4) 『鴨長明全集』貴重本刊行会 平成十二年刊
- (5) 『宝物集・閑居友・比良山古人靈託』新日本古典文学大系
- (6) 往生伝はすべて日本思想大系『往生伝・法華験記』により、『後拾遺往生伝』・『本朝新修往生伝』は私に読み下した。
- (7) 廣田氏注(2)「発心集」の説話配列」論文
- (8) 慢心により天狗道に墮ちることは、『比良山古人靈託』・『沙石集』・『太平記』など諸書に見える。
- (9) 『方丈記』の閑居の様を記す段に次のようにある。

いま、日野山に跡をかくしてのち、東に三尺余の庇をさして、柴折くぶるよすがとす。南、竹の簀を敷き、その西に閑伽棚をつくり、北によせて障子をへだてて阿弥陀の繪像を安置し、そばに普賢をかき、まへに法花経をおけり。……西南に竹の吊棚を構へて黒き皮籠三合をおけり。すなはち和歌・管絃・往生要集ごときの抄物を入たり。
- (10) 『大往生』の用例に、『角川古語大辞典』は近松の「念仏往生記」を挙げ、『日本国語大辞典』は寛永版『曾我物語』、『時代別国語大辞典』室町時代編は『看聞日記』応永三二年六月十一日条を挙げる。
- (11) 新潮日本古典集成『方丈記 発心集』の傍注は「いやしい身の上で」とする。身分の低いものの往生譚は、卷三第一話も含め「樵夫」の例など複数みられる。
- (12) 第十三話より阿弥陀の言葉の解釈の部分掲げる。

木を切には、いかに大なる木といへどもたゆみなく是を切れば、終として切たをさすと云事なし。怠て切やすむべからず。家に帰には、又くるしとて中にとどまる事なかれ、はふはふも必行付べし。志深して怠らずは、疑あらざる由教給へる

なり。

(13) 源大夫譚は、『今昔物語集』卷十九第十四話「讃岐国多度郡五位、聞法即出家語」に見える。出家を止めようとする郎等に向い源大夫は、『今昔』では「汝等我が吉き身と成らむと為るをば、何に思て妨げむと為るぞ」と言い、それまでの悪についての自覚的な言葉を記すが、『発心集』は「をのれが斗はかりにては、我思立たる事をば、いかでさまざまとすぞ」として、悪人の自覚が明確にみられる言葉にはなっていない。むしろ、彼の無心な発身・出家を印象つける効果をあげていると考えられる。

(いけだ けいこ・京都府立大学教授)